

英語初学者に対する助動詞 *do/does/did* の指導方法への一考察

藤 原 康 洋

A Study of Teaching the Auxiliary Verbs *do/does/did* to Beginning Learners of EFL

Yasuhiro Fujiwara

抄 録

英語の本動詞文を疑問形や否定形で表す際に登場する助動詞の *do/does/did* は、英語の初学者にとって理解の困難な統語上のポイントであり、そこでの躓きは後の英語学習への大きな障害となる。本稿では、その障害を避けるための方策として、本動詞とそれらの助動詞との関係についてのある考え方にに基づき、初学者が論理的に英文構造を理解するための指導法を考察する。それは、それらの助動詞が肯定形で本動詞の中に深層構造として埋め込まれており、疑問形や否定形の際にその深層構造が顕れるとする考え方である。生成文法の発想と似ているが、それとの相違点についても触れる。

キーワード：形式助動詞、本動詞、深層構造、生成文法

(2006年9月29日 受理)

Abstract

Mastery of the auxiliary verbs *do/does/did*, conventionally termed as “dummy do” when used in interrogative and negative sentences, is often regarded as having difficult syntax by beginning learners of EFL. Failure to master this point is likely to cause a considerable damage to the proceeding language learning process. This article presents a practical way of teaching these particular auxiliary verbs that is designed to avoid the aforementioned failure. This approach is based on an idea concerning the relations between those auxiliary verbs and main verbs; the former being embedded in the latter in the affirmative sentences on the deep-structure level, and whereas the former are presented in interrogative and negative sentences. Though this idea is similar to that of generative grammar, a basic difference between the two will be discussed.

Key words: dummy do, main verbs, deep structure, generative grammar

(Received September 29, 2006)

はじめに

約20年間、中学校英語を教えてきた筆者の経験を通して、英語初学者（本稿では中学1・2年生）が躓きやすいポイントを幾つか挙げるができる。音韻面では英語独特の発音や抑揚、形態面では代名詞の人称変化、名詞の複数形語尾、動詞の時制変化など、また統語面では、SV先行や後置修飾など日本語の構文とは異なる構文、本動詞が述語動詞として使われる文（以下、本動詞文）における助動詞 do/does/did の用法などである。

その中で統語面の最後に挙げた「本動詞文の疑問形や否定形に助動詞 do/does/did が登場する」点は英語初学者にとって大きな壁である。音韻面や形態面では反復練習による慣れから自然に理解の進む生徒が多い。他方、統語面では、反復練習だけではどうしても理解に達しない生徒が毎年厳として存在する。この助動詞 do/does/did は中学1年次後半の生徒が最初に躓きやすい点であり、その後の英語学習の妨げとなる場合が多い。したがってこのポイントを、英語学習における最初の重要な分岐点と筆者は捉えている。

反復練習だけで十分な理解に達しないのなら、分かりやすい説明を行い、生徒が抱く「なぜ？」との疑問に答えることが必要となる。筆者は、中学校（特に2年次前半）の授業展開で、伊藤他（1976）を例とする変形文法を応用した指導法⁽¹⁾に基づいて助動詞 do/does/did を教えている。その指導方法の考え方を以下に説明する。因みに、このような助動詞 do/does/did は様々な名称で呼ばれているが、本稿では形式助動詞と言及する⁽²⁾。

1. 形式助動詞を理解する困難さ

1.1 形式助動詞に関して初学者が犯しやすい間違い

形式助動詞に関して初学者がどのような間違いを犯すのかを概観する。筆者の勤務校では be 動詞文が最初に導入されるテキストを用いているが、1年次初頭で、例えば

(1) He is Mr. Jones.

の疑問形と否定形を

(2) Is he Mr. Jones? / He is not Mr. Jones.

と学習するのだが、1年次後半に登場する本動詞文において

(3) He plays baseball.

の疑問形と否定形を

(4) *Is he plays baseball? / *He is not plays baseball.

との誤文を産出する生徒が少なからずいる。筆者の経験的概算では、1年次終了時点で10%前後の生徒がそれに該当する。同様に彼らは

(5) They play baseball.

の否定形と疑問形を

(6) *They are not play baseball. / *Are they play baseball?

と、また

(7) He played baseball.

の否定形と疑問形を

(8) *He is not played baseball. / *Is he played baseball?

と誤答する傾向がある。

これらの誤答の原因として、be 動詞文における疑問形や否定形の作り方を本動詞文にも当てはめることが考えられる。角田 (1991) は、自らが調べた130の言語の中で「万能選手の do を否定文に使うのは英語だけである」⁽³⁾と述べ、晴山 (2005) も、「英語を習い始めたばかりの生徒たちが、『文法助動詞 (形式助動詞のこと)』を用いた疑問文や否定文の作り方に戸惑いを覚えるのは、むしろ自然なことなのである。」⁽⁴⁾と言う。本動詞文には be 動詞文とは異なる規則が否定形や疑問形において働いていることを理解させるのは、もともと容易な指導とは言いがたい面がある。

本動詞 do を用いる文では混乱の度が更に深まり

(9) They do their homework.

の否定形や疑問形を

(10) a. *They are not do their homework.

b. *They do not their homework.

(11) a. *Are they do their homework?

b. *Do they their homework?

と誤答する。(10)b.と(11)b.では、助動詞 do を正用できても、一文に do を二度使うことに違和感を覚えていると考えられる。

1.2 形式助動詞の一般的な教え方

生徒が所有する教科書や参考書の多くは、その規則を単に提示する(つまり、「否定形や疑問形では do/does/did が使われ、動詞は原形になる」との説明)だけで、生徒が規則を覚えるに任せている。英語教員が参考にする、英米で出版されている英文法書も同じ事情である。たとえば、Marianne Celce-Murcia と Diane Larsen-Freeman の THE GRAMMAR BOOK では、助動詞が操作詞として挿入関係や変形関係に与っていることが樹形図により説明されているが⁽⁵⁾、具体的な教え方を提示する Teaching Suggestions では上述の単なる規則提示に留まっている⁽⁶⁾。また、Rodney Huddleston と Geoffrey K. Pullum の A Student's Introduction to English Grammar は、dummy do を説明する箇所と同様の規則を提示するのみである⁽⁷⁾。

かかる規則の提示だけでは、助動詞 do/does/did がどこから降って湧いたような印象となり、本動詞が原形に戻る規則との必然的関連が解き明かされていない。これらの説明では、なぜ形式助動詞が否定形や疑問形で突然登場するのか、そして、なぜ否定形や疑問形では plays や played が原形の play に戻るのかが英語初学者には理解し難いまとなる。

2. 形式助動詞の指導についての考え方

2.1 深層構造 — 「形式助動詞が本動詞に内在する」との考え方

筆者は、前述の伊藤他(1976)同様に、本動詞の中に形式助動詞が含まれていると教えている。本動詞の play は do と PLAY (原形、区別のため大文字で表す、以下同じ)との融合であり、plays は does と PLAY の融合、played は did と PLAY の融合と捉える。

(12) They play baseball. / He plays baseball. / He played baseball.

は表層構造であり、その深層構造を

(13) They do PLAY baseball. / He does PLAY baseball. / He did PLAY baseball.

と規定する。また、不規則変化動詞に関しても

(14) He went there.

の深層構造を

(15) He did GO there.

と形態上の無理を承知で規定する。そして、全ての英語の本動詞文において(後述する完了形を例外とし)、本動詞に「助動詞+動詞原形」という深層構造が存在する、と規定する。

本動詞文が疑問形になる時、その深層構造が顕れて、本動詞に含まれていた助動詞が主語の前に放り出され、そのため動詞原形が主語の後ろに残ると教える。また、否定形の場合にも同じく深層構造が顕れて、助動詞と動詞原形の間に否定詞が挟みこまれると教える。この教え方により、形式助動詞がどこから降って湧いたのではないこと、及び形式助動詞が登場することにより動詞原形が顕れる理由を説明する原理を得ることになる。

2.2 生成文法における形式助動詞の考え方との関係

深層構造という用語が示すとおり、生成文法の考え方と似ていることを付言しなければならない。しかし、筆者の理解した限りでは微妙な差異がある。中井・上田(2004)は次のように説明している。「現在時制を表す要素を Present、過去時制を表す要素を Past と表記すると、現在形 = 原形 + Present, 過去形 = 原形 + Past となる。この抽象的な要素の Present が、三人称単数の場合は s で具現され、その他の人称では具現されない(あるいは、ゼロ形式で具現される)と考えよう。」⁽⁸⁾筆者は、do などは抽象的な要素ではなく具体的・実在的に本動詞に内在しているものであり、人称により「s やゼロ形式で具現される」ものではなく具体的に do などとして本動詞内に包含されている、と捉えている。確かに、生成文法においても本動詞と時制形態素に関連して「融合」という概念が用いられているが、上の引用の如く、例えば played = play + PAST という形で表象される融合であり、筆者の拠る played = did + PLAY という融合ではない。形式助動詞自体は生成文法において、あくまで「付加」されるものと見なされている⁽⁹⁾。

形式助動詞の発生を生成文法は「do 支持」と呼ぶが、安井(1996)による英文法辞典は do-support を以下のように記述している。「文中に助動詞要素が含まれていない場合に

は、いわゆる迂言の do (形式助動詞のこと) が替わってこの役割を果たす。この do はそれ自体の意味を持たず、もっぱら助動詞の果たすべき機能を単に代替している要素であると考えられるので、変形生成文法では、この種の do を深層構造では生成せず変形規則によって導入するという提案が行われた。その規則が『do による支え』と呼ばれる。⁽¹⁰⁾「深層構造では生起せず」、「導入」される do ではなく、筆者は do が深層構造レベルに「もともと存在する」と捉える。

金子・遠藤 (2001) も、「助動詞 (法助動詞のこと) を伴わない文では、一般動詞 (本動詞のこと) は文否定の not と共起できず、形式助動詞 do を必要とし、not に後続して生ずる。」⁽¹¹⁾と説明しており、形式助動詞が「必要とされ」外部から導入されるとの見方を取る。Radford (2006) に詳しく展開されている「do 挿入」という概念も、挿入との語が示すとおり、本動詞に内在しているものとは考えていない⁽¹²⁾。角田 (1991) による次の説明中の「持ち込んで」も「挿入」と同じ発想である。「文に be 動詞も助動詞も無い場合には現代英語ではそのままでは倒置できない。対応する平叙文には無いのに、助動詞 do を持ち込んできて do と主語を倒置させる。」⁽¹³⁾

以上のように、生成文法による説明は筆者のものと同じとは言い難い。前述の伊藤他 (1976) 以外で、この度調べた中では龍城 (2006) の次の記述に筆者と同じ発想を見出した。Sarah smiled. (smiled = did + smile = PAST + Process) がその部分であるが⁽¹⁴⁾、本稿で展開している形式助動詞の議論とは関連性を見出せなかった。

2.3 深層構造「形式助動詞 + 動詞原形」の存在証明

この深層構造が存在することを証明するものとして、ある種の強調文がある。例えば

(16) He came here yesterday.

を強調して、「彼は昨日確かにここに来た。」を表す場合

(17) He did COME here yesterday.

となることは周知だが、なぜ動詞原形 COME が現れたのかを説明する際、助動詞 did と本動詞原形 COME の深層構造が顕れることによって動詞部分が強調されたと教えることができる。否定形や疑問形の場合にのみ形式助動詞が降って湧くのではなく、肯定形においても形式助動詞は本動詞内に内在していることの証拠であると考えられる。

命令形の強調も同様に本動詞内における助動詞の内在を証明する。

(18) Don't beat around the bush. Tell me the truth now. Don't be afraid.

の第二文に関して、その動詞部分を強調すると

(19) Do TELL me the truth now.

となるが、この Do が本動詞ではなく助動詞であることは明らかである。(18)の第一文、すなわち本動詞文の否定命令形における Don't の Do が助動詞であるのと同じである。ただし(18)の第三文のように、be 動詞文の否定命令形で do が使われることは、本稿の深層構造理解からは説明できず、形式助動詞 do の例外的使用例として特別な注意を要する。

一部の倒置構文も (20) のように肯定形における深層構造の存在を示す。

(20) Little did he KNOW that she loved him.

2.4 法助動詞と形式助動詞の統語的同一性

法助動詞と形式助動詞は統語的に同一と考えられる。この点も生成文法と異なる⁽¹⁵⁾。

(21) He does RUN fast.

は、前述のように He runs fast. の深層構造と考えられるが、(21)は

(22) a. He can RUN fast.

b. He must RUN fast.

などと、主語＋助動詞＋動詞原形という構造において同一である。すなわち、否定形では助動詞と動詞原形の間に否定詞が挟まり、疑問形では助動詞が主語の前に出る、という点で同じ統語構造をしている。(21)では does と RUN が融合して

(23) He runs fast.

という表層構造に転換するのに対して、法助動詞は意味を担っているので動詞原形と融合せず、常に(肯定形においても)深層構造が顕わになっていると教えることができる。

(22) の否定形を

(24) a. *He isn't can run fast. / *He doesn't can run fast.

b. *He isn't must run fast. / *He doesn't must run fast.

と繰り返し誤答する生徒には、この「顕れた」深層構造でもって説明することができる。

また、本動詞文の疑問形、例えば

(25) Do you SWIM?

に対する応答としての

(26) Yes, I do. / No, I don't

における do も

(27) Can you SWIM?

に対する

(28) Yes, I can. / No, I can't.

における can も、同一の働きをしている。すなわち、

(29) Yes, I swim. / No, I do not SWIM.

では疑問形に登場した swim の不要な繰り返しとなるので、Yes, I swim. の深層構造の

(30) Yes, I do SWIM.

から重複の SWIM を取り去り、

(31) No, I do not SWIM.

から重複の SWIM を取り去った結果、

(32) Yes, I do. / No, I don't.

を得る。同様に、もともと深層構造が顕れている

(33) Yes, I can SWIM. / No, I can't SWIM.

から疑問形と重複の SWIM を取り去ると

(34) Yes, I can. / No, I can't.

を得ることになる。Thomson & Martinet (1988) は

(35) Do you smoke?

の疑問形に対して Yes, I smoke. は誤りで Yes, I do. が正しいと説明する際に、「do は本動詞の代用をする」⁽¹⁶⁾ というが、can の説明頁のどこにも、「can は本動詞の代用をする」とは記述されていない。意味を担う法助動詞を本動詞の代用と規定すれば意味的に無理があるからだろう。一貫していない「代用」や「代動詞」との概念に頼らずとも、「深層構造の顕現と本動詞の省略」により、形式助動詞と法助動詞について一貫した yes/no 応答の論理を説明することができる。

付加疑問文からも、法と形式両助動詞の統語的同一性が覗える。

(36) He runs fast, doesn't he?

は、もともと

(37) He runs fast, or doesn't he RUN fast?

と、発話者が自ら表出した言辞の「反対が真実かもしれないと心配になり念を押す」表現が基であると考えられるが、He can't RUN fast, can he? の基である

(38) He can't RUN fast, or can he RUN fast?

を(37)と比較すれば、(37)の does と(38)の付加部の can は疑問形に登場する助動詞として統語的に同一であることが分かるだろう。

2.5 本動詞 do を用いる文での形式助動詞

生徒の誤答として先に紹介した本動詞 do との混乱もこの考え方により避けられる。この(否定形や疑問形の際に本動詞原形の do を主語の後ろに置き忘れる)誤答は、do/does/did 等の do 関連の語が一文に二つ登場することへの違和感からくと前述した。

(39) They do the dishes. / He does the dishes. / He did the dishes.

の各文の深層構造をそれぞれ、

(40) They do DO the dishes. / He does DO the dishes. / He did DO the dishes.

と捉えたと、例えば

(41) Did he DO the dishes?

(42) Did he WASH the dishes?

の二文は統語的に同一構造であることが初学者にも納得され、(41)で do 関連の語が一文に二つ登場する必然性が論理的に理解されやすくなる。

2.6 現在完了形の指導における深層構造の適用

中学後半で学ぶ現在完了形の学習において、しばしば中学生は

(43) She has arrived home.

の疑問形と否定形を、

(44) a. *Does she have arrived home? (稀に *Did she has arrive home?)

b. *She doesn't have arrived home. (稀に*She didn't has arrive home.)
と誤答する。明らかに、has を本動詞の現在形と (また、arrived を本動詞の過去形と) 誤認している。現在完了形に「助動詞+動詞原形」という深層構造は当てはまらないが、現在完了形における have (has) が助動詞であること (すなわち深層構造の前半だけが当てはまっていること) を強調することにより

(45) Has she arrived home?

との正答に導きやすくなる。

2.7 間接疑問文の指導における深層構造の適用

中学3年で導入される間接疑問文も、この深層構造の考え方を適用することにより理解を促すことができる。例えば、「彼がいつ出発したか教えて。」の英文である

(46) Tell me. + When did he LEAVE? = *Tell me when he did LEAVE.

と、「彼がいつ出発する予定か教えて。」の英文である

(47) Tell me. + When will he LEAVE? = Tell me when he will LEAVE.

の二つの英文は、構造的に全く同一 (間接疑問の部分、疑問詞+主語+助動詞+動詞原形) であるといえよう。その上で、(46)における did と LEAVE が隣接により融合して、肯定形の表層構造である left となり、その結果

(48) Tell me when he left.

の正文を得ると説明すれば、間接疑問文の仕組みを論理的に教えることができる。

2.8 英語発達史の知見から

英語発達史の観点からは、形式助動詞のうち少なくとも do が否定文で現れたのは16世紀以降、また yes/no 疑問文に登場してきたのが16世紀以降、同じく Wh-疑問文には17世紀中頃の登場とされている。それ以前の否定文は否定詞が肯定文に挿入されるだけであり、疑問文は動詞と主語が倒置していた。本来「～させる」との意味を持つ使役の動詞だった do が、その意味を弱めて否定や疑問を表す記号に転化し、「主語の後に動詞が欲しい」という英語の欲求を満足させた、と説明される⁽¹⁷⁾。英語の歴史的発達過程からは、本稿でいう深層構造は理論的に裏付けされず、英語初学者を教えるための便宜的方策に留まるということになる。

3. 生徒への理解度アンケートから

3.1 アンケートの質問内容と実施要領

本稿の考え方による授業を中学校で (主に2年次前半と、それ以降は必要に応じて)、板書により長年行ってきたが、その工夫の成果を盛り込んだ英文法テキストを筆者は自作作成し、2005年度の中学2年生に対して使用し始めた。その結果、形式助動詞への理解度が過年度の2年生より向上したとの感触を筆者は得ている。この理解度向上を検証するために、現在中学3年生であるその生徒たちにアンケートを実施した (Appendix 参照)。

対象者は欠席3名を除く男子181名。2006年11月20日の英語授業時間の一部（約10分間）を使い行った。アンケート設問の【1】は本稿の論旨に関わる助動詞 do/does/did の知識を問う試験形式とし、対象者にその知識内容を思い出してもらった助けとした。【2】の設問では、その知識の理解度に関する対象者の主観的評価を四段階で記してもらった。

3.2 アンケートの結果

項目【2】の結果は以下の表1の通りである

3.3 アンケート結果の分析と今後の課題

まず気がつくのは、2年1学期に初めて説明を受けた時点と現時点で生徒の感じる理解度が全く不変（平均値が共に3.0）であることである。これは、生徒がその1年半の間に見せた形式助動詞に関する理解の進展具合と明らかに矛盾する。というのは、筆記試験における読解や作文、また授業中の発話などを通して、生徒の形式助動詞に関する間違いはこの期間に確実に減少しているからである。このことは、形式助動詞の知識は内在化して

表1 助動詞学習後の生徒アンケートの結果

1. 助動詞の理論的説明を受けた時		
その内容を理解できましたか？	人数(人)	割合(%)
1. 全く理解できなかった。	9	5.0
2. あまり理解できなかった。	36	19.9
3. 少しは理解できた。	80	44.2
4. よく理解できた。	56	30.9
2. 助動詞の理論的説明は、その後		
英語を理解するのに役立ちましたか？	人数(人)	割合(%)
1. 全く役立たなかった。	23	12.7
2. あまり役立たなかった。	76	42.0
3. 少しは役立った。	65	35.9
4. とても役立った。	17	9.4
3. 現時点で、助動詞の理論的説明内容を		
どの程度理解できていますか？	人数(人)	割合(%)
1. 全く理解できない。	10	5.5
2. あまり理解できない。	41	22.7
3. 少しは理解できる。	66	36.5
4. よく理解できる。	64	35.4
4. 助動詞の理論的説明は必要ですか？		
必要なら、いつの時点で必要ですか？	人数(人)	割合(%)
1. 必要ない。	35	19.3
2. 中学1年で必要である。	70	38.7
3. 中学2年で必要である。	67	37.0
4. 中学3年で必要である。	9	5.0

1. 平均値=3.0（選択肢番号1.を1点、2.を2点、3.を3点、4.を4点として計算）
2. 平均値=2.4（同上）
3. 平均値=3.0（同上）

英語運用能力に転化しているが、上記アンケートに回答できる形では英語学習者自身に明示的に把握されていないことを示しているのだろうか。それとも、その他の解釈の可能性があるのであるのだろうか。もし前者であるとすれば、その内在化と転化に対して本稿で紹介した教え方が有効に働いたか否かが次の課題となる。

筆者の教え方の有効性についての生徒自身の捉え方については、設問2.の平均値2.4が示すように、彼らは有効性をさほど感じていないようだ。生徒の主観のとおりこの教え方の有効性がさほど高くなかったのか、それとも生徒自身には明示的に捉えられていないがその後のスムーズな英語学習に繋がったのかについては、筆者の主観（後者）を支える客観的なデータを現時点では得ていない。中学卒業前に毎年行う3年間の総まとめ試験の結果や英語検定の合格者数などを過年度のものと比較する必要がある。

ところで、設問4.の結果は、筆者の教え方が中学1年と2年で必要であると7割以上の生徒が感じていることを示している。ただし、生徒の年齢を考えると教師の教え方を自由に批判できる主体とはなり得ていないことが考えられ、この数字は割り引いて捉えなければならぬであろう。

より正確な検証のためには、本稿の考え方による授業展開を受ける群と受けない群を設けた上で、共通の試験を実施してその得点を数値的に比較することが必要だろう。対象が中学生であるがゆえに統制のかけ方に困難が予想されるが、今回のアンケート結果を授業展開に活かすことを含め、筆者の今後の課題としたい。

注

- (1) 伊藤健三、佐々木昭、大友賢二、吉沢美穂、伊村元道編（1976）『英語指導法ハンドブック① 導入編』東京 大修館書店 pp.468-469
- (2) このような助動詞 do/does/did は、「第一助動詞」（安井稔（1996）『コンサイス英文法辞典』東京 三省堂 p.89.）、「擬似的法助動詞」（浅川照夫他（1986）『新英文法選書第4巻 助動詞』東京 大修館 p.4.）、「文法助動詞」（晴山陽一（2005）『英語は動詞で生きている！』東京 集英社 p.156.）、「形式助動詞」（金子義明・遠藤喜雄（2001）『英語モノグラフシリーズ8 機能範疇』研究社 p.16）などと様々に呼ばれているが、「形式助動詞」が本稿で用いられる意味に適すると考えた。
- (3) 角田太作（1991）『世界の言語と日本語』東京 くろしお出版 p.233
- (4) 晴山陽一（2005）前掲書 p.158
- (5) Marianne Celce-Murcia & Diane Larsen-Freeman（1999）*THE GRAMMAR BOOK An ESL/EFL Teacher's Course* (2nd. ed.) Boston: Heinle & Heinle, p.191 & p.206
- (6) Marianne Celce-Murcia & Diane Larsen-Freeman（1999）前掲書 p.220
- (7) Rodney Huddleson & Geoffrey K. Pullum（2005）*A Student's Introduction to English Grammar* Cambridge: Cambridge University Press, p.38
- (8) 中井悟・上田雅信（2004）『生成文法を学ぶ人のために』京都 世界思想社 p.53
- (9) 岸本秀樹（2005）『日英語対照研究シリーズ8 統語構造と文法関係』東京 くろしお出版 p.72. 及び金子義明・遠藤喜雄（2001）前掲書 p.16
- (10) 安井稔（1996）前掲書 p.239
- (11) 金子・遠藤（2001）前掲書 p.14

- (12) Radford, A. 外池滋生監訳 (2006) 『入門ミニマリスト統語論』東京 研究社 pp.151-157
- (13) 角田太作 (1991) 前掲書 p.17
- (14) 龍城正明 (2006) 『ことばは生きている 選択体系機能言語学序説』東京 くろしお出版 p.73
- (15) Radford, A. (2006) 前掲書 pp.44-45
- (16) Thomson A. J. & Martinet A. V. (1988) 江川泰一郎訳注、A Practical English Grammar 『実例英文法第4版 (改訂版)』東京 Oxford University Press (Tokyo) p.180
- (17) 岸田隆之・早坂信・奥村直史 (2002) 『歴史から読み解く英語の謎』東京 教育出版 pp.6-9

Appendix

英語の教え方に関するアンケート

2006年11月20日

※次の各問いに答えてください。試験ではありません。英語の教え方の参考にするためのアンケートです。
ご協力願います。

【1】 次の説明文の空所に適当な英単語を一語ずつ入れてください。

He plays tennis.の否定文は He () not play tennis.であり、またその疑問文は () he play tennis?であるが、このように文を作る理由は次のように考えられる。すなわち、He plays tennis.における plays の正体は実は ()+()であり、その二つの内の前者が否定文や疑問文で登場したわけである。また They play tennis.の否定文と疑問文はそれぞれ They () not play tennis.と () they play tennis?である。この場合、最初の肯定文にも後の否定文・疑問文にも同じ play が見られるが、それは They play tennis.における play の正体が ()+()だからである。

また、He does his homework every day.の文における does の正体は ()+()であり、They do their homework every day.における do の正体は ()+()である。従って、He does his homework every day.の否定文と疑問文は、He () not () his homework every day.と、() he () his homework every day?であり、They do their homework every day.の否定文と疑問文は They () not () their homework every day.と、() they () their homework every day?となる。

【2】 上記のような文法説明を2年生になった最初のころに行ったが、以下の設問に対する君の感じ方として当てはまる番号に○をしてください。

1. 上記の【1】の説明を2年1学期に受けた時、その内容を理解できましたか？
1 全く理解できなかった。 2 あまり理解できなかった。 3 少しは理解できた。 4 よく理解できた。
2. 上記の【1】の説明は、その後英語を理解するのに役立ちましたか？
1 全く役立たなかった。 2 あまり役立たなかった。 3 少しは役立った。 4 とても役立った。
3. 現時点で上記の【1】の説明内容をどの程度理解できていますか？
1 全く理解できない。 2 あまり理解できない。 3 少しは理解できる。 4 よく理解できる。
4. 上記の【1】の説明は必要ですか？ 必要ならいつの時点ですか？
1 必要ない。 2 中学1年で必要である。 3 中学2年で必要である。 4 中学3年で必要である。

ご協力、ありがとうございました。藤原康洋